近藤保造の墓

成田公民館長　龍前　宏

明治維新の立役者の一人、木戸高允の知遇を得て活躍し、御前揮毫の光栄にあづかったことのある女流画家奥原清湖は、明治二十四年二月東京を離れ、愛弟子晴嵐を連れて、熊谷市上川上の地に移住した。

晴湖が熊谷の地に移る際、執事兼女世帯の警護役として、旧幕臣大久保の士分であった近藤保造と妻千佐子を帯同した。保造は明治三十七年十一月六日病を得てこの地で没した。時に六十六歳であった。

昭和４四十九年龍渕寺が墓地整理を行った折、何故か近藤家の墓石が無縁仏として処理されていることを小耳に挟んだ私は「なんとかわいそうなこと」と直感した。

無縁仏に行ってみると、正に晴湖の筆による近藤家と書かれた台石と、明山慈保居士、明観貞寿大姉の戒名が読める墓石があった。私はその足で住職にお目にかかり、「事の成り行きはどうであれ、近藤家の墓を奥原晴湖の墓地内に移転してもらえないか」と懇願した。旬日足らずして晴湖の墓に向かって右手の入り口に移転してくれた。

「タウン・タウン熊谷」の中村記者にこの件を話したところ「かわいそう」の言葉が記者の心を刺激し、情報誌に掲載され公に認知された格好になった。

警護役だった近藤保造は、未来永劫にわたり晴湖側に居られるようになったことで、さぞや本望のことと思う。

歴史はほんのちょっとした「縁」と僅かな言葉でつくられていくものかも知れない。

（熊谷市公連だより　第４号　平成 20 年より）